

## 「おなか」の診察 治療行為兼ねる

**Q** 先日、漢方専門の医療機関を初めて受診しましたが、「おなか」の診察方法が西洋医学とずいぶん違う印象を受けました。漢方の診察の特徴などについて教えてください。

する抵抗力の強弱を知ることができ、局所の漢方所見と合わせて処方を決めていく。

西洋医学の腹部所見の診察は、おなかに何か異常なものがないかなど「診断」のための診察である。一方、漢方の診察は処方の手がかりとなる所見を見つけるという「治療」という観点からの診察である。従って漢方では、目の病気であつても鼻の病気であつても必ず腹診をする。

**A** 漢方では四診（ししん）と呼ばれる診察が行われる。望診（ぼうしん・視診）・聞診（ぶんしん）・問診（もんしん）・切診（せつしん・触診）を指す。切診の中でも、腹診（ふくしん）というおなかの診察には特別の意義があるとして、長年の経験の積み重ねが体系化されている。腹診には患者の全身状態と病態に特異的な局所反応を同時につかむという狙いがある。全身状態の反映として、特に慢性疾患では病気に対

ところで質問者の手紙の中に「診察を受けてとても気持ちがよく、気分もおちついた」と書いてあつたが、これは漢方の大きな特質といつてよい。漢方では診察行為は同時に治療行為でもあると考へている。患者の体にじかに触れることは医療行為の原点であり、診察の際に決して過度の苦痛を与えないことが腹診のコツである。